

令和2年度 自 己 評 価 表			鳥取県立鳥取聾学校ひまわり分校
中長期目標 (学校ビジョン)	聴覚障がいのある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、自立と社会参加に向けて豊かな心とたくましく生きる力を育てる。	今年度の重点目標	1 確かな学力の定着を図るための学習指導の充実(学力向上) 2 自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実(たくましく生きる力の育成) 3 心身の健康と豊かな自己表現力の育成(心身の育成) 4 生徒に対する指導の充実を図るために必要な業務改善

評価基準	A:具体方策により期待する具体目標レベルに十分達している。⇒問題なし B:具体方策により期待する具体目標レベルにほぼ達している。⇒特に問題なし C:具体方策によるが期待する目標レベルには達していない。 ⇒経過を分析し、改善方策を検討 D:具体方策が不十分で期待する目標レベルには達していない。⇒改善方策が必要
------	---

評価項目	年 度 当 初			
	評価の 具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策
1 確かな学力の定着を図る学習指導の充実	幼稚園部	・慣れない環境に不安になる幼児もいるが、やり方が分かり安心すると、いろいろな活動や遊びに興味・関心をもって取り組もうとする。体験したことや自分の思いを伝えるためのことばを十分に獲得しているとはいえない。	・体験したことや自分の気持ち、身のまわりの出来事などを伝えるためのことばを獲得し、自信をもって伝えようとしている。	・発達段階に合わせた写真日記等の指導や1日の活動のふり返りと言語化への取組を進める。また、体験活動をもとにしたごっこ遊び等の人との関わりを通した活動から、幼児の実態に合わせたことばの獲得の取組を進める。
	小学部	・絵本に触れあい、親しむ機会を設定しているが、内容を十分に理解し、情景を想像して楽しむまでは至っていない。	・絵本を読む楽しさを感じ、想像する楽しさや伝え合う喜びを味わいながら、工夫して表現している。	・絵本に親しむ活動を継続するとともに、学級における絵本の読みきかせの時間を十分確保する。
	中学部	・児童は大変意欲的に学習に取り組んでいる。個々の児童の実態に合わせて指導を進めているが、目標としている語彙の獲得数には達していない。	・獲得語彙数が増え、既習事項を活用して学習を深めることができる。	・学習の足跡を掲示し、既習の学習内容を振り返る場面で活用する。聴覚を活用する場面を取り入れながら、正しい発声や手話でことばを覚えることができるように繰り返し確認する。 ・語彙の獲得のために、教科を横断的にとらえ、ことばの指導を繰り返し行っていく。
	支援部	・聴覚障がい特性の理解、適切な支援の検討をすすめて指導に当たっているが、新任の教員が多く、十分な指導にはまだ至っていない。	・児童の障がい特性、実態に応じた適切な支援内容や方法を工夫し、共通実践されている。	・校内研修をもとに、障がい特性の理解を深めていく。また、毎週開く学部会で個々の児童の障がい特性や実態についてのケース検討を行い、改善に向けて共通理解を図り、指導を統一する。 ・授業を公開し、適切な指導となっているか検証しあい、授業改善をはかる。 ・「思考をくすぐる6つの活動」をもとに授業改善を進める。
	教育研究部	・ふりかえりシートに記入する活動を通して、生徒自身が自らの課題に気づいたり学習方法を改善しようとしたりする機運が高まっている。 ・「思考をくすぐる6つの活動」を意識して指導案を作成したり、学習場面での支援や工夫などを共通理解したりして授業に取り組んでいる。	・自分に合った学習方法を確立し、目指す進路に向け自信を持って日々の学習に取り組んでいる。 ・実態に応じた支援が共通実践され、生徒の論理的な思考を促す学習が展開されている。	・ふりかえりシートの活用を継続し、自らの学びを振り返るとともに、教員とのコミュニケーションを取りながら、自己肯定感を高めていく。 ・生徒が論理的に考えたり表現したりするための手立てを共通理解する場を設け、授業改善につなげる。
2 自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実	幼稚園部	・意欲的に学習や保育活動に取り組み、「思考をくすぐる6つの活動」等の継続により、考えをまとめて伝えようしたり要点を絞ったふりかえりができるようになったりしてきたが、語彙力やコミュニケーション力にはまだ課題が見られる。 ・幼児児童生徒の適切な実態把握と目標設定、実態に合った指導・支援のあり方について、教職員間で十分に連携をとっていく必要がある。	・学習や遊び、まわりの人との関わりから、語彙力や自己理解力、コミュニケーション力を高め、生きる力につなげている。 ・全職員が研修や実践を通して専門性を高め、聾学校における自立活動や教科指導についての理解が深まっている。	・一人一研究授業(事前・事後研修会)、授業研究会の実施による研修の機会の確保。 ・「鳥聾スタンダード」「ひまわりスタンダード」の定期チェックによる教職員の意識付け。 ・自立活動流れ図等を活用した実態把握と共通理解(グループ研)。 ・自立活動指導プログラムを生かした授業実践及びプログラムの見直し。
	小学部	・人数の少なさや、幼児に合った遊具等の環境の不足により、ダイナミックな活動や人との関わりが十分にできていない。	・様々な素材に触れながら、遊びを工夫して、充実感や満足感を味わいながら遊びこんでいる。	・子どもの想像力をかきたてて遊びが発展するような材料を、すぐに手に取れる身近な場所に設置したり、教師が新しい遊びを生み出すきっかけを提示したりして、自由あそびが広がる環境を整える。
	中学部	・様々な遊び方や発想に触れる機会が少なく、遊びに偏りがある。交流保育の回数確保が難しく、大きな集団の中での活動経験が少ない。	・いろいろな友だちと仲良く遊び、イメージを共有したり、折り合いをつけたり、ビデオレター等を通して、友だちと関わることの楽しさを味わっている。	・ルール性のある遊びや制作活動の共同制作を定期的に行う。遊び方を理解して安心して遊ぶことができるように、わかりやすい視覚的支援や教師の見本等を工夫し一緒に活動する。 交流保育については、交流園へ啓発も含め間接交流等の可能な関わり方を工夫する。
	支援部	・中・学部生徒や交流校児童との学習の機会に、自分の思いや意見を挙手して積極的に伝えようとしている。新入生についてはこれから指導を積み上げていく。	・学部内の児童、中・学部生徒や交流校児童との関わりあいの中で、自分の意見や思いを積極的に伝えることができる。	・同学部児童、中・学部生徒や交流校児童との関わりあいの中で、自分の意見や思いを積極的に伝えることができるように、事前事後の学習で意識を高めていく。 ・なかよしタイム等の場で中・学部生徒に関わっていく場を設定し、自信を持って相手に伝えることができるように経験を積み上げていく。
	キャリア教育部	・友達が好きで仲良く交流しているが、相手の気持ちを考えなかったり、相手の気持ちを受け止められなかったりすることがある。	・まわりの人の気持ちを考えて、その場に応じたルールやマナーを身につけ、行動することができる。	・まわりの人の気持ちを考えたり受け止めたりすることができるように、その場面をとらえて丁寧に指導する。
3 心身の健康と豊かな自己表現力の育成	幼稚園部	・進路学習や職場体験学習で学んだことから見いだした成果と課題から、自分の進路について方向性についても定まりつつあり、日頃の学習などに取り組んでいる。	・目指す進路の実現のために必要な力やスキルを自覚し、課題解決に向け、主体的に取り組んでいる。	・生徒との対話や進路情報の発信などを通して、自分の進路に必要な力やスキルを確認し、課題解決につなげる。
	小学部	地域の学校、保育園、幼稚園、市町村、病院、支援センター等と繋がりができてきたので、継続的に連携することが必要である。	感染防止を考えながら、様々な方法で関係機関と情報交換や情報提供をしながら連携を深めている。	・乳幼児教室や通級指導について作成したリーフレットを郵送、HPに掲載して、教育相談活動の啓発を行う。 ・教育相談の具体的な活動内容のDVDを作成し、保護者や在籍保育園に配布する。 ・聴覚障がい理解に関する研修会を少人数で行う。 ・各機関と通信や電話、メールでのやりとりを増やす。
	中学部	・キャリア教育の研修や啓発を計画的に進めているが、研修などで保護者の参加が少なく、学校と家庭の連携が十分ではない。	・教職員から保護者へキャリア教育に関する情報提供や指導が適切に行われ、学校と家庭の連携が深まっている。	・保護者と教職員のキャリア教育についての意識向上のために、キャリア教育通信の内容の精査、校内掲示の工夫、職員研修の充実を進めていく。
	支援部	・キャリア教育段階表をもとにした指導及び支援についてケース検討会などを通し、共通理解ができ、日々の指導・支援につなげている。キャリア・パスポートの目的や活用の仕方について、教職員の共通理解が必要である。	・キャリア教育段階表を意識したり、キャリア・パスポートを活用したりして、幼児児童生徒の目指す姿やつきたい力をつけるべく、日々の実践を行っている。	・年度初めに各学部でキャリア教育段階表の確認を行ったり、長期休業中にケース検討会を行ったりすることで、発達段階に応じたキャリア発達に向けた指導を充実していく。 ・学期ごとにキャリア・パスポートの実施状況を確認するとともに、ふるさとキャリア教育についての共通理解を図る研修の機会を設定する。
	健康安全教育部	・お互いに関わりをもって活動しようとしているが、獲得していることばの量や実態の違いにより、気持ちを伝えたり受け止めたりすることが難しい場面が見られる。	・獲得語彙が増え、手話や音声等で自分の経験や気持ちを積極的に伝えたり、相手の話を受け止めたりしてやりとりを楽しんでいる。	・普段から手話での会話を促し、手話を積極的に使用する態度を育てる。会話の中でのやりとりがしやすいような問いかけや共感などの適切な支援を行い、自分の経験や気持ちを伝えたり、相手の話を受け止めたり、返答したりしているときには、十分に賞賛する。
務実生徒改善を図るための指導の充実	幼稚園部	・全身を十分に使って遊ぶ経験が少なく、状況に応じて機敏に体を動かして危険を回避することが難しい場面がある。	・遊びの中で十分に体を動かすことを通して、危険な場所、状況などを理解し、自ら安全な行動をとろうとしている。	・様々な遊びの経験が積めるよう、月ごとに自由あそびの計画を立て、時間を十分に確保する。安全に活動できる場の設定を行って遊びの環境の充実を図るとともに、幼児と一緒に安全確認を行うことを徹底する。
	小学部	・相手に伝わる音声言語と手話を使って、自分の感じたことやそのときの情景を伝えようと積極的にやりとりをしている。新入生は、まだ手話表現が曖昧になったり、コミュニケーションの方法として定着していなかったりする。	・音声言語と手話を使った適切なやりとりをすることができる。	・手話を必ず入れてコミュニケーションをすることを徹底する。曖昧になった時は繰り返し指導する。
	中学部	・健康状態について自分で伝えたり、自分で考えて季節や環境に合わせて着替えたりして、落ち着いて生活している。自分の健康状態について正確に伝えられないことがある。	・発達段階に応じて、健康で安全に生活していくための方法や危険発生時、緊急時に対応できる力を身につけている。	・音声言語と手話を使った適切なやりとりが身につくように支援し、うまくできているときには十分に賞賛する。 ・健康で安全に生活していくための方法や、緊急時等のあらゆる事象の場面を紹介し、適切な判断について考える場面を設定する。
	支援部	・自分の考えを上手く伝えようと努力し、自信を持って人前で話したり、話し合い活動を進めたりする場面が多く見られる。	・相手の気持ちに寄り添って話したり、自分の考えを上手く伝えたりして、話し方や話し合い活動に自信をつけている。	・話し合い活動や人前でスピーチする機会を意図的に設け、お互いの気持ちに寄り添ったコミュニケーションのとり方について客観的に振り返りをして整理する。
	健康安全教育部	・健康で安全に生活していくための方法、緊急時に取るべき行動についてはほぼ身につけて、落ち着いて生活している状況に応じて動く必要性についても理解しつつある。	・自分や周囲の状況を適切に把握し、健康で安全に生活し、あらゆる状況に対応する力を身につけている。	・健康で安全に生活していく方法や緊急時等のあらゆる状況の場面を紹介し、適切な判断の仕方について考える活動を設定する。
務実生徒改善を図るための指導の充実	幼稚園部	・乳幼児教室ひよこぐみにおいて、乳幼児に寄り添おうとする保護者の姿は見られるが、きこえやことばを育む関わり方が十分にできていないといえる。	・乳幼児を取り巻く両親をはじめとする家族が、乳幼児にわかるコミュニケーション手段を使って楽しみながらやりとりをしてことばを育んでいる。	・家庭につながる絵本の読みきかせや遊び、絵日記等の取組の充実。 ・実態に応じた保護者への情報提供。 ・保育園、医療機関等、関係諸機関との情報交換及び研修の実施。
	小学部	・昨年度からフジニックス・エクササイズを参考にした「柔軟性向上 ひまわりピクス」を各学部で取り組み、少しずつ柔軟性が向上している現状がある。	・柔軟体操を習慣化し、体づくりを行い、体力の向上をさらに意識している。	・学校全体で「ひまわりピクス」を一緒に行う時間を確保したり、取り組んでいる様子を紹介したりする。 ・身体測定の時に、長座体前屈で自分の柔軟性を確認する。
	中学部	・新型コロナウイルス感染症の発生により、健康に関する正しい知識や実践を習得しなければならない現状がある。	・健康に関する正しい知識(感染予防等)を紹介し、幼児・児童・生徒が意識して実践しようとしている。	・健康に関する正しい知識(感染予防等)を掲示したり、実践している様子を紹介したりする。
	支援部	・一人あたりの時間外業務が県内特別支援学校の中でも上位になっている。年度末年度始や行事多忙期やまとめの時期に多忙となる。	・日常的に、どの職員も18:30退勤ができている。を目標にし、課題を出し合い改善策を考え実行している。 ・今までは違う考え方ややり方を取り込み、試してみることができた。	・コロナ対応の情報共有や対応や計画変更などを円滑に行えるように、情報共有の場を設ける。 ・様々な学習や行事などの延期や変更が重なり、業務過多にならないように全体を調整する機会を定期的に設ける。 ・早帰らダイの設定をし、計画的な業務の推進と健康管理の意識を高める。
	健康安全教育部	・業務の削減の検討はするものの一人にかかる業務が減らない現状があった。	・時間の使い方や会議の精選など、再度検討する必要がある。	

	中間評価			
	経過・達成状況	評価	改善方策	
幼稚園部	・幼児の実態に合わせて、学級ごとに毎日の写真日記を制作し、振り返りに活用することができた。行事の中止等により、体験活動が組みにくかったが、限られた条件の中でも達成感を味わうことができるように努め、体験したことを写真やことばで掲示し確認できるようにした。 ・毎日合同での絵本の読みきかせの時間を設定し、様々な絵本に触れることができています。年齢に応じた読みきかせの時間(学級)をもっと確保したい。	B	・写真日記を継続し、幼児の成長に合わせて、体験したことや日々の生活を言語化できる環境を整えていく。日々の生活の中に体験的な要素を取り入れた取り組みを通して、幼児が心を描さぶられる経験しながら心情面を表すことば等を確認し、ことばを獲得していけるようにする。 ・絵本の選定やテーマ設定、読みきかせの仕方、学級での絵本の読みきかせの時間の確保等について、図書館とさらに連携しながら情報交換や共通理解を図る機会を持つ。	幼稚園部
小学部	・教員が、聴覚障がい教育の基本的な指導事項、支援について研修等を積み上げることで、学習指導の中で、児童の獲得語彙数を増やすことができています。 ・研修等を通して、児童の障がい特性、発達に応じた指導、支援の方法を理解し、個々の教員が実践している。	B	・職員間の共通理解をもとに、カリキュラムマネジメントの意識を持ちながら、様々な教科指導で出てきたことばの指導を横断的に進める。また、ことばの理解を深めることができるように拡充模倣を徹底して行う。 ・実態や課題について、学部会や日頃の情報交換を通して、指導、支援の共通理解、指導の統一をはかる。	小学部
中学部	・ふりかえりシートを活用し生徒自身が自らの学びを振り返り、次時の授業改善に活かす取り組みを行っている。ただ、各教科によって実態が違うため、ふりかえりシートの有効な活用について共通理解を図る必要がある。 ・各教科で思考を促す授業展開について模索したり、板書について生徒自身の発言や授業の流れが視覚的にわかるような工夫を行ったりしている。しかし、授業の取り組みで有効であったことや良かったことなどについて情報交換をする機会が少なかつたため、計画的に場を持つ必要がある。	B	・ふりかえりシートからの具体的な授業改善や自己肯定感を高めるやりとりについて実践状況を確認し、ふりかえりシートの形式や振り返り方法について共通理解を図っていく。 ・論理的な思考を促す方策について情報交換をする場を計画的に設け情報を共有し、日々の授業改善につなげていく。	中学部
教育研究部	・子どもの課題を意識した関わりや支援を心がけることで、子どもたちが自らの考えを伝えようとする場面が増えたが、相手の話を受け止めようとする姿勢にはまだ不十分さがある。 ・自立活動流れ図の検討や、自立活動指導プログラムを活用しての一人一研究授業の事前・事後研修会を学部ごとに実施してきたことで、学部内で共通理解が図られ、幼児児童生徒への支援の工夫に活かそうとする意識が高まってきている。	B	・職員研修だけでなく、学部会等から少しずつ時間を生み出し、学部の必要性に応じたミニ研修を積み重ねていく。 ・鳥豊スタンダードの結果や、参観ウィークアンケートの意見を指導に活かしていく。 ・全体授業研究会を通して、自立活動のあり方について考え、理解を深める。	教育研究部
幼稚園部	・様々な素材を使って、遊びを拡げているが、個人内で遊びが終わってしまうことも多く、友達との関わりの中で広がっていく様子はまだ少ない。 ・交流保育では、交流ができなかった間、交流校にビデオレターを送って交流校の友達への関わりを作ったり、補聴器のこと等を説明した紙芝居を作成して各交流園に伝えたりして啓発に努めることができた。	B	・教師の関わり方や環境設定の仕方等、遊びについての研修をしたり、自由あそびの年間計画を見直したりする。教師も一緒に関わりながら、友達と一緒に楽しむことができるルール性のある遊びをする機会を定期的に設ける。 ・交流保育に向けて事前、当日、振り返りの時間を学級で設け、集団での関わり方やきこえにくい場面など、自分のことを考えられる時間を確実につくる。	幼稚園部
小学部	・自分の思いや気持ちを伝えようとする姿が見られるようになっていが、それが 正しく伝わっていないことが多い 。 ・ルールやマナーを知り、行動しようとする姿が増えてきた。しかし、相手の気持ちを考えて行動する姿は少ない。	B	・子ども同士のやりとりの機会を意図的に設定し、伝える経験を積み重ねるようにする。 その場にあった言い方 でできたことを褒める等支援方法や声かけの共通理解をはかる。 ・ルールやマナーを守り、相手の気持ちまで考えを広げられるように、 機会を捉え 指導を徹底する。	小学部
中学部	・高等部体験入学や職業適性検査、進路学習などを通して、自分の進路に対する意識が高まっている。しかし、生徒によつては、職業に対するイメージが希薄であったり生活改善に向けた取組が不十分であったりするなどの課題が見られるため、それらの指導について検討する必要がある。	B	・個々の課題について指導方針や内容について共通理解を図るとともに、課題解決に向けた場面設定を授業の中で取り入れ、必要な力を伸ばしていく指導を行っていく。	中学部
支援部	・来校が難しい期間の教育相談や学校見学の問い合わせには、リーフレットや活動内容のDVD等を送付して対応した。 ・聴覚障がい理解に関する研修について、希望学校(6校)や保育園(4園)に出向いて個別に実施した。 ・病院から紹介があった幼児、児童について、保護者の同意のもと在籍園や学校に電話でやりとりをして、連携・支援できる関係をつくることができた。	B	・相談活動や通級指導について幅広く理解啓発を図るため、HPを活用し情報を発信していく。 ・電話、メールでのやりとりを増やして、さらに連携を深めるようにする。特に支援を行った学校については、3学期に連絡をして、その後の様子について聞き取りをする。 ・一側性難聴の理解を深めるために、資料作成や校内研修の機会を設ける。	支援部
キャリア教育部	・定期的なキャリア教育通信の発行、きこえないきこえにくい人たちの活躍の記事などの掲示を通して、キャリア教育の意識向上を進めることができた。学校と家庭との連携については一工夫が必要である。 ・キャリア教育段階表の確認、ケース検討会を実施を通して、幼児児童生徒の実態把握の共通理解を図るとともに、今後の指導のポイントについて共有することができた。 ・ふるさとキャリア教育やキャリア・パスポートの進め方について研修会を開き、取り組みについて共通理解を図ることができた。	B	・引き続き、キャリア教育通信の定期的な発行、校内掲示の更新を行う。また、懇談などを通して保護者にキャリア教育について話をする機会を設定する。 ・ケース会議などで共通理解した指導のポイントを日々の実践につなげるとともに、学部会等で確認の時間を設定する。 ・キャリア・パスポートの進捗状況を確認するとともに、ファイルの保管場所、活用方法を共有する時間を設定する。	キャリア教育部
幼稚園部	・学級の時間に伝えたいことを友達や先生に伝える時間を作ったり、教師に注目して話をきく環境を設定したりすることで、友達や教師とのやりとりもできるようになったり、手話による表出や自発語が増えたりしつつある。 ・コロナ禍の中、限られた環境の中での活動が多く、天候や気温等に配慮しながら、体力の維持向上に努めることができた。	B	・有意義な話し合い活動ができるように、話形を提示したり、やりとりを板書で残したりすると言語力を伸ばす工夫を行ったり、生活の中で出てきたことばを取り上げ、繰り返し確認できるように掲示したりして定着を図る。 ・活動の前に安全に活動する約束を確認するとともに、運動の時間や学級の時間等で計画的に外遊びや散歩などができる時間を確保する。	幼稚園部
小学部	・音声言語と手話を用いて表現しようとするが、手話や指文字にあいまいな所がまだある。 ・危険時対応訓練での行動はできる。しかし、普段の生活の中での危険への意識はまだ低い。	B	・教員が丁寧な範を示し、正しい手話や音声活用、その場に合った会話のやりとりを確実に押さえていく。 ・児童が自ら考え、教員とともに判断、行動できるように、日頃から 健康や安全に気をつける生活 の積み重ねを大切にしていく。	小学部
中学部	・新型コロナウイルスの影響で、話し合い活動や人前でスピーチをする機会が十分ではなかったが、意図的に生徒会やグループ活動などの中で、自分の意見を整理して伝える場面を設けた。ただ、自分の意見を整理して伝えたり、TPOに応じた言動をしたりすることについては課題がある。 ・避難訓練などを通して、健康で安全に生活していく方法や緊急時の対応方法について学びを深めることができた。しかし、居住地において実際に自分で判断して行動したり、各サービスを利用したりすることについては課題があるため、継続的な指導が必要である。	B	・学級活動や自立活動で、ワークシート等を準備し、自分の考えを整理したり、相手の気持ちに寄り添ったコミュニケーションのとりかたを考えたりする活動を積極的に取り入れ、自信につなげていく。また、学校生活の中から機会を捉え、適切な話し方や活発な話し合い活動のスキルを高めている。 ・110番アプリやNet119などのサービスの活用の仕方を伝えたり、社会で起こりうる事例を紹介したりして、自分でどう行動するかを考える学習の場を設定していく。	中学部
支援部	・教育相談活動や「ひよこだより」を通して、子どもとのやりとりや家庭の役割、きこえに対する支援等を保護者に伝えた。 ・園訪問や学校公開を通して、保育園等と情報交換や研修を行った。	B	・絵本の読みきかせ、絵日記等のと理組を継続・発展させる。 ・進路を踏まえた情報提供をしていく。 ・ミニ研修会、ミニ手話学習会を積極的に実施していく。	支援部
健康安全教育部	・体育の学習をはじめ、毎日の活動の中で、ひまわりピクスに取り組み、柔軟体操を習慣化し、体づくりを行うことができています。 ・長座体前屈の記録を掲示したり、取り組みの様子を紹介したりすることで柔軟性への興味につながっている。 ・感染予防の様子を紹介(掲示)することで、マスクの着用や検温、消毒の徹底などの意識向上につながっている。 ・健康教育参観日などの学習や児童生徒会活動での啓発ポスターなどを通して、感染予防を意識し、実践しようとする姿が見られる。	B	・体育の学習などでひまわりピクスなどいろいろな柔軟運動を継続して取り組む。 (・学校全体で、ひまわりピクスを行う時間を設定する。(児童生徒会など)) ・引き続き、長座体前屈の記録を掲示したり、自分の柔軟性を確認する時間を設けたりすることで、柔軟性向上に向けた意識を図っていく。 ・さらに、健康に関する正しい知識(感染症予防等)や実践している様子を紹介することで、さらなる感染予防の意識の向上を図る。 ・実態や年齢に合わせた感染予防に関する内容や掲示を検討し、工夫していく。	健康安全教育部
(1)個々の時間外業務の削減目標の達成 (2)校務分掌の見直し	・年度当初4～5月は、教頭、教務、学部主事主任の打合会を毎朝設け、情報共有に努めた。 ・新型コロナウイルス感染症の拡大予防のため、様々な学習や行事の延期や中止等の判断基準に迷うこともあり、対外的な連絡業務等が急がれる場合があった。 ・早帰らデイの設定はしているが、教材研究、事業・活動企画の業務は減りにくく、日常的に18:30退勤はできない職員が固定化している。	C	・検討・調整作業が円滑に進むように、情報共有の工夫やコミュニケーション力の向上に努める。 ・来年度に向けた検討作業に早く取りかかり、計画的に行う。 ・業務が重なっている職員の業務軽減策を、学部や分掌で話し合い、時間外業務の削減に皆で取り組む。	(1)個々の時間外業務の削減目標の達成 (2)校務分掌の見直し

最終評価(1月)		
経過・達成状況	評価	次年度に向けての改善方策
・1日の活動の見通しをもったり、写真日記等を通して振り返りを行ったりすることで、自分の気持ちやその理由、体験等をことばで説明できるようになってきた。ごっこ遊び等の体験的な活動を重視し、身につけたいことばを精選して結びつけながら活動に取り組むことで、楽しい雰囲気の中で語彙を獲得し、日々の生活の中でも使う場面が見られた。	A	・集団で活動した内容を各学級で補完し、活動をつなげていくことを大切にする。1日の活動の見通しをもったり振り返ったりすることや、季節に応じたことばや体験的な活動から得たことば等の獲得を意識したかわりを丁寧にしていく。視覚的支援や掲示を工夫し、確かな発音や発声、手話、指文字によるやりとりの充実を図る。親子での写真日記や絵日記の取組について啓発と充実に努める。
・毎日、時間を決めて合同の絵本の読みかきせをすることで、絵本への興味がより深まり、学校図書館の活用にもつなげることができた。なかよしあそびでの絵本の読みかきせの活動も充実し、活動につながっている。学級で読む絵本の充実に向けて、年齢にあった絵本の選定についてさらに学校図書館と連携していく必要がある。		・絵本の読みかきせの時間を設定し、絵本に親しむ活動を毎日行う。読みかきせの仕方や年齢にあった絵本の選び方等について研修するとともに、幼児と保護者が一緒に絵本に親しむことに向けて、学校図書館と連携しながら啓発していく。「保育とカリキュラム」を参照する。
・学年に応じた語彙数には至っていないが、児童の獲得語彙数は増えている。	A	・教師の聴覚障がい教育の専門性を高め、児童の実態に応じた指導・支援を行うことで、学力の定着を図る。
・児童一人一人の障がい特性や指導・支援方法についての共通理解を日頃から学部内で図ることができ、統一した実践をすることができた。		・引き続き、児童の実態や課題の共通理解を図るとともに、将来を見据えよりよい生活ができるように、さらに力を付けることのできる有効な指導や支援を話し合う。
・指導や支援がパターン化・固定化してしまっており、執着につながることもあった。		・指導や支援が固定化しないように柔軟に対応するとともに、共通理解を図った上で、それぞれの教員が工夫改善の意識を持って取り組む。
・ふりかえりシートの形式や振り返り方法について話し合う機会を設けたことで、生徒の実態に合った授業実践を行い、生徒の学びを深めることができた。	A	・学習活動の充実のため、授業担当者が情報交換する場を定期的に設けて、思考を促す方策やふりかえりシートの活用について共通理解を図っていく。また、言語活動の充実に向け、言語環境の整備や授業改善などを行っていく。
・学部研究や事前研、事後研を通して、生徒の実態や課題、論理的な思考を促す方策などについて情報交換を行い、生徒の実態に応じた目標設定や日々の授業改善につなげることができた。		
・意図的な活動の積み重ねにより、子ども同士が関わり合う姿、相手に合わせて伝え方を考えて関わろうとする姿が見られるようになった。	A	・聴覚障がい教育の専門性の維持・継承のための取組 ◇一人一研究授業(事前・事後研修会)、授業研究会、ケース研究会、参観ウィークの実施による、実態把握と支援の共通理解をする場の確保。 ◇「鳥壘スタンダード」「ひまわりスタンダード」の定期チェックによる教職員の意識付け。 ◇自立活動指導プログラムの見直し・改善による、プログラムの有効活用。
・参観ウィークや一人一研究授業、全体授業研究会、それに伴う事前・事後研修会等の実施により、職員一人一人の聴覚障がい教育への理解を深めることができた。全職員で全幼児児童生徒を見るという意識が高まっている。		
・いろいろな素材や材料を身近な場所に常設したり、活動後に掲示や展示をして一緒に遊ぶように促したりすることで、子どもたち同士でやりとりをしながら楽しむ様子が見られた。年長児が年下の友達に作り方を教えたり、手伝ったりする姿もあった。	A	・季節の自然物を含め、いろいろな素材や材料を用意したり、新しい遊びを生み出すきっかけを提示したりして、子どもたちが興味を持ったり、十分に遊びこんだりできるように、子どもたちに寄り添いながら支援を工夫していく。
・体験的な活動をもとにしたごっこ遊びを通して、子ども同士が関わり合いながら活動することが増えた。交流保育では、ビデオレターによる交流をしたり、居住地交流圏の友達と関わる楽しさを感じ、遊びの幅が広がったりした。		・友達同士で遊びあえる環境設定を行うとともに、子どもたちがお互いの様子を見合いながら制作できるような共同制作の機会を設定する。交流保育のときには、きこえにくさ等の啓発とともに、友達との関わり方等について目標を定め、一人一人の実態に応じた支援をしていく。
・身近な教師や友だちに対して、児童それぞれが、積極的に相手に思いを伝えようとする姿が増えてきた。	B	・機会を捉えて、適切な伝え方や良いこと悪いことなどの決まりを繰り返し指導していく。
・意に反する場面や苦手な場面や普段関わりが少ない相手に対しては、ことばや手話が不十分なことが多く、必要なことであっても自分から質問したり願ったりすることができないこともあった。		・困っていることをそのままにしておく、さらに困ってしまう状況になること等、自分を見つめ直し、どうしたらよいかを考えられるようその都度、教師とやりとりしたり必要な時間を設けたりする。
・寄宿舎体験、進路学習などを通して、自分のことを客観的に見たり、夢や目標に合った進路先を考えたりすることで、自分なりに進路を決めることができた。また、生活改善に向けた取組を授業の中に取り入れたことで、生徒自身が自分の生活スケジュールや行動を見つめ直したり将来に必要な力やスキルを自覚したりすることができ、課題解決や将来に向けての意欲が高まっている。	A	・自分の夢や目指す進路を少しずつ意識できるよう、中1の段階から、体験活動を充実させるとともに興味・関心に基づく勤労観・職業観の形成や社会的・職業的自立に向けた基礎を作っていく。また、主体的に進路を選択することができるよう、鳥取聾学校高等部や高等学校での学習の様子や各コースの内容などの情報を適宜伝えていく。
・一側性難聴について短時間であったが、校内での研修をして理解を深めることができた。また、作成したリーフレットを一側性難聴児の在籍学校や通級担当者会、西部地区の特別支援教育連絡会等で配布した。	B	・支援内容や支援方法を検討・工夫して諸機関と継続的に連携が図れるようにする。
・保護者や関係機関と「たより」「電話」「メール」等を中心に、情報交換を行い連携を深めた。継続的な繋がりはできたものの、ニーズに対応できないこともあった。		・定期的な学校訪問や教育相談を行い、難聴特別支援学級と連携を深めるようにする。 ・新生児スクリーニング検査について校内での理解を深め、諸機関に情報提供や啓発を行う。
・キャリア教育だよりや校内掲示、懇談での保護者への講話により、キャリア教育に関する周知を適宜行うことで、キャリア教育への意識の向上が見られた。	A	・来年度も継続してキャリア教育だよりの定期的な発行や校内掲示の更新を行う。
・それぞれの幼児児童生徒の実態や課題について、キャリア段階表をもとにケース会議を持ち共通理解をすることができ、指導につなげていくことができた。		・年度当初、キャリア教育やキャリア教育段階表、キャリア・パスポートについて共通理解する時間を設ける。また、ケース検討会の時期についても確認を行う。
・キャリア・パスポートの進捗状況を随時確認し、有効な活用につなげることができた。また、保管場所や活用方法について確認を行い、他の教員がいつでも閲覧できたり指導に活かすことができたりすることができた。		・今年度と同様に、キャリア教育の取り組みやキャリア・パスポートについて、個人懇談等で保護者に説明する機会を作るようにする。 ・保護者からのコメントを書いてもらうなど、家庭でもキャリア・パスポートに取り組んでいくことができるように工夫する。
・様々な経験がきっかけとなり、様々な活動に取り組むことができた。また、様々な活動を通して、様々な経験を積むことができた。また、様々な活動を通して、様々な経験を積むことができた。	A	・年々、様々な活動に取り組むことができた。また、様々な活動を通して、様々な経験を積むことができた。
・天候がよい日は戸外で遊ぶ時間を設け、体力作りに努めることができた。様々な遊びを通して、積極的に体を動かすことができている。確認した約束を守り、教師の支援を受けながら安全な行動をしようとする姿が見られた。		・様々な遊びの経験が積めるよう、月ごとに自由あそびの計画を立て、時間を十分に確保する。安全に遊ぶことができる環境設定を行い、常に教師が見守る体制を整える。子どもと一緒に安全確認を行いながら、子ども自身が危険な場面や状況を判断できる力をつけるよう繰り返し支援していく。
・児童の獲得語彙数は少しずつ増えつつあるが、手話やことばが曖昧な場面も見られ、相手に正確に伝わりにくいことがある。	B	・適切なやりとりを行うために、教員が引き続き正確で確かな手話を使い、その場に応じた指導を行っていく。
・毎月の保健指導で学習したことを意識して、自分の体調や安全に気を付けて生活しようとする姿が見られた。		・保健指導の事後指導を十分に行之い、家庭との連携を図りながら生活に活かしていく。
・学級活動や自立活動だけでなく、各教科においても生徒のコミュニケーション力を高めるために、人前で発表する場面やソーシャルスキルトレーニングを意図的に活動内容に取り入れて実施することができた。取組を重ねたことで、話し合いの場面で適切に伝えようとしていたり、TPOに応じた言動が増えたりした。	A	・人前で自分の考えを堂々と伝えることや自分の気持ちを的確に伝えることができるよう、学習活動の中でそのような場面を意図的に設定する。
・聴覚障がい者に対する支援事業の理解や合理的配慮の求め方などの学習を通して、健康で安全に生活し、あらゆる状況に対応する力がついてきている。		・健康で安全に生活していく方法や緊急時での適切な判断や行動の仕方について学ぶ場を設定する。
・手話による絵本の読みかきせを毎日実施したことにより、読みかきせに口で言われて手話を模倣したり、親子で手話を楽しんだりする姿が見られるようになった。	B	・親子のやりとりを育む楽しい活動を積極的に提供していく。
・「ひよこだより」や「みみだより」を使ってミニ研修を行ったり、身近な手話のイラスト集を制作して実態に応じて伝えていったりしたことにより、家族や在籍園へ理解の広がりが見られた。		・保護者研修会の資料を整理し、系統立てててもれなく情報提供ができるようにする。
・幼・小・中学部ともに「ひまわりビクス」をはじめいろいろな柔軟体操に取り組み、体づくりを行うことができた。〔今年度は、新型コロナウイルス感染症のため、学校全体で行うことはできなかったため、来年度取り組んでいきたい。〕	A	・引き続き、「ひまわりビクス」をはじめいろいろな柔軟体操の活動の様子を掲示し、意識向上につなげる。
・長座体前屈の記録を自分で確認する時間を設定すること(シールを貼る、前の月と比べるなど)で、柔軟性向上を意識している姿が見られた。		・健康に関する実践については、繰り返し指導する必要があるため、引き続き、健康に関する正しい知識(感染症予防等)や実践している様子を紹介する。
・柔軟性の向上については、個人差があるために全員の柔軟性が向上しているとはいえないが、けがの人数については、年度当初より大幅に減った。		
・各学級での実態に応じた指導や保健指導そして新たな感染予防の方法(トイレや手指の消毒)の紹介等を通して、感染予防の意識向上につながり、実践することができた。		
・8:00～18:00の電話対応とし、留守番電話対応を取り入れたことで、18:00以降の業務に集中できるようになった。	C	・全体の業務を調整することがなかなかできず、来年度の業務配分の工夫が必要である。
・職員の退勤状況は、18:30までには退勤できる職員と、それ以降も業務が続く職員に別れ、改善解消することができにくかった。		・職員の体調管理の面で、時間外業務時間が増える職員には、積極定期な対応や全体での検討が必要である。